

金山 勉

立命館大学 産業社会学部教授

×

上野 隆三

立命館大学 体育会アメリカンフットボール部部长

×

米倉 輝

立命館大学 体育会アメリカンフットボール部監督



金山 勉  
KANAYAMA Tsutomu  
立命館大学 産業社会学部 教授



上野 隆三  
UENO Ryuzo  
立命館大学 体育会アメリカンフットボール部 部長



米倉 輝  
YONEKURA Akira  
立命館大学 体育会アメリカンフットボール部 監督

# The Way to Team Goal Achievement

チームゴール達成への道

**立命館大学パンサーズでは3つのチームゴールを達成するために日々の活動を行っています。アメリカの大学で学ばれ、マスコミ学、コミュニケーション学にお詳しい立命館大学産業社会学部教授の金山先生を交えて、チームが掲げる3つのチームゴールを達成するために必要なことについて上野部長、米倉監督とお話いただきました。**

写真●国島 紗希(立命スポーツ編集局)

大学の顔としての  
フットボールチームと  
コミュニティ

上野 アメリカの大学ではフットボールチームが大学の「顔」になっているところが多くあると思います。いろいろな方々から「パンサーズは大学の看板だね」と言っただけは大変ありがたい、うれしいことなのですが、アメリカの大学におけるフットボールチームと同じようなレベルで、大学の「顔」になり得ているかという、まだそこまでは行き着いていないのかなと感じています。金山先生は、学内からチームを見られてどのような感覚をお持ちですか。

金山 アメリカのフットボールチームは、一般の学生も含めて、大学と一体化する文化的な背景があります。みんなが熱狂して週末にフットボールを見に来るような地域ですと、学生と大学だけではなく、街と大学スポーツ、とりわけフットボールが一体化しているようなところがあります。そういう意味では、アメリカの長い歴史の中で築かれたものなんだという気がします。単純に日本と対比するとかなわないなあと感じたりもします。例えば、チームのヘッドコーチがキャンパスを歩くだけで、周辺に人が集まってきて週末の試合の話になったりします。プロスポーツよりも身近な大学スポーツに熱狂する環境というのは独特で、その場にいるとなかなか楽しいですね。

上野 大学の中はもちろんのこと、地域と強く連携する仕組みが作られているということですね。

金山 大学やコミュニティがチームやヘッドコーチを前面に押し出して大学スポーツを押し上げて行くことが、自然に行われているのは、文化的背景だけではなく、そのような流れにする「仕組み」の存在も大きくて、例えば私がマスコミ学を学んだ大学では「Coach's Corner」というスポーツジャーナリズム、スポーツメディアを専攻する学生たちが中心となって制作する、地元ケーブルテレビの番組がありました。これを立命館大学に置き換えると、びわこくさつキャンパス界隈で、常にこういう番組が流れているイメージですね。常に大学とコミュニティの距離感が近くなる仕掛けが幾つもあります。

上野 コミュニティーも含めて大学スポーツに熱狂している環境というのは、関東では箱根駅伝や早慶戦で見られるのですが、関西ではあまり多くないですね。特定のプレーヤーがマスコミに取り上げられ、知名度が急上昇した時くらいでしょうか。関西でフットボールが最盛期を迎えていたのは立命館が台頭してきた1990年代頃だったと思います。立命館が初優勝する前後はかなりお客さんも入っていましたね。

米倉 ちょうど私が現役のプレーヤーを過ごし、立命館のコーチングスタッフ入りした1990年代のビッグゲームでは、実数で3万人を超えていたのではないのでしょうか。老朽化はしていましたが、試合が行われるメインスタジアムには交通アクセスがよくて、フットボールを観るために必要な高さがある阪急西宮スタ

ジアムがあって、そういう意味で私達の世代は幸せでした。現在の関西学生リーグ全体の競技レベルは当時よりも深化しており、今のプレーヤー達にもああいう環境のなかで試合をさせてあげたいと、よく感じます。

上野 チームは根強いファンの皆様に支えられているのですが、試合会場では現役の大学生を見かけることが少なくなっているような気がします。部員の友人が友人を呼ぶような連鎖が起きるのが理想なんです、なかなかそうはならないのが現状です。アメリカでは子供の頃からフットボールが身近にあって、誰もがどういスポーツか知っていると思うのですが、日本ではなかなかなじみにくい部分もありますしね。

金山 やはり大学スポーツは地域社会を牽引しなければいけないと思います。地域社会を牽引する存在であるということはコミュニティに根ざし、大学の一番のフロントに立つことです。自分をきちんと律して、どのようにコミュニティに働きかけることができるのかという発想は常に求められますね。

大切なのはアカデミックな姿勢

金山 アメリカの大学スポーツはコミュニティとの関わりが強い一方で、NCAA(全米大学体育協会)のアカデミックとアスレティックの両立、いわゆる文武両道への厳格さ、また、そこにこだわった取り組みが大変印象深いです。アメリカの大学に在学中、フットボールを



## 2012 Panther Development

自ら「気づき、考え、実践する」

### ① Panther Development Seminar (PDS) (セミナー方式)

自分の考えを整理し、他の構成員とディスカッションしながら、共通認識を形成していく

### ② Panther Development Project (PDP) (プロジェクトグループ方式)

チームに存在する各種問題について、グループで討議し、その改善策の提案および実施

## Panther Development Seminar 2012 講演一覧 (全6回)

### #0 チームゴールおよび2012年度スローガンについて

立命館大学体育会アメリカンフットボール部 監督 米倉 輝  
立命館大学体育会アメリカンフットボール部 2012年度主将 服部 真明

### #1 スポーツする学生はどうあるべきか

学校法人立命館 顧問 川本 八郎

### #2 PANTHER IDENTITY

99年度卒 三輪 泰督 02年度卒 北出 幸裕 03年度卒 長田 健 04年度卒 長谷川 昌泳  
06年度卒 谷口 祐二 08年度卒 澁田 淳一 10年度卒 佐藤 修平

### #3 スポーツは知力・脳力が勝負だ!

学校法人立命館 総長 川口 清史  
立命館大学 スポーツ健康科学部 学部長 田畑 泉

### #4 「強い心」を作るには

立命館大学 学生サポートルーム カウンセラー 田中 享

### #5 アスリートとモチベーション

メジャーリーグ ベースボールプレーヤー 大家 友和

観に行き、「なんであの選手が試合に出いていないの?」と、思ったら「成績がだめだったらしい」なんていうことはよくありました(笑)。  
上野 我々のチームでもチームゴールを定めているのですが、その中で大学生としてちゃんとしてこうという目標があります。アメリカの大学フットボールチームではスポーツだけではなく、勉強もきちりすることが当たり前になっていることは、よく耳にしますね。  
金山 NCAAが定める基準を大学当局は責任をもってフォローしていますね。成績が一定基準に達していない選手が試合に出られないことはもちろんのこと、授業への出席状況をチェックしたり、定められた練習時間を超えて

いないかの確認をしたり。しかも、その厳格な基準を全ての大学に平等に適用するあたりがアメリカらしいですね。立命館大学も体育会の全てのクラブに単位修得基準を定めて、スポーツだけに限らないよう、堅実に学位を取って、文武両道の選手を責任をもって社会に送り出して行くというポリシーが根付いていることが感じられますね。  
米倉 しかしながら、リクルーティング活動などをしていると、高校生からはなかなか厳しい目で見られているのかなと感じます。立命館では厳しく勉強させられると(笑)。確かにミーティングや練習の時間設定は授業最優先で組んでいますし、試合に出場するための成績基準

## Panther Development Project 2012 概略

- ① 課題の「気づき」  
幹部、部員(シニアリーダーを通じて)、コーチ
- ② PDH (PD Headquarter) が課題ごとの小グループを設定  
ポジション・回生・性別を越えてメンバー選抜
- ③ PDP (PD Project) で課題について議論と共に  
チーム内の課題を発見、共有  
期限等は案件による。問題の本質を追求し、具体的な改善策を検討する
- ④ PDD (PD Diet) で討議し、改善策の承認・実施  
部員全員でミーティングを実施する。PDPで議論した結果、承認がなければPDPへ差し戻し。

⇒時限的ではなくチーム活動期間を通して実施する  
= PANTHERSのチーム自治活動そのもの

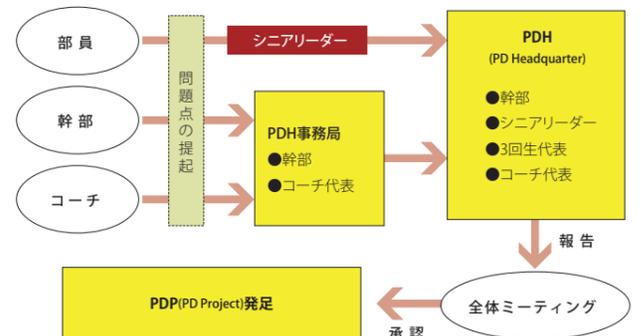
も厳格です。思うのですが、練習に真剣に取り組むだけではフットボールは上手くなりません。メジャーリーガーのイチロー選手の有名な言葉なのですが「野球がうまくなりたかったら、宿題をしっかりとやれ」と。まさにその通りだと思います。  
金山 大学教育の中でスポーツに取り組む姿勢を真摯に考えて、社会に有意な人材を送り出すという意味で、これには信念をもって取り組むべきです。フットボールは関東よりもむしろ関西発の文化になりつつあり、さらに関西のフットボールチームの中において、立命館は存在感があるチームです。立命館のプレーヤーたちの影響力は大きいはずなので、ぜひ、ここはぶれることなく取り組んで、立命館の基準が全国区になるくらいにしたいですね。

## Panther Developmentの到達点

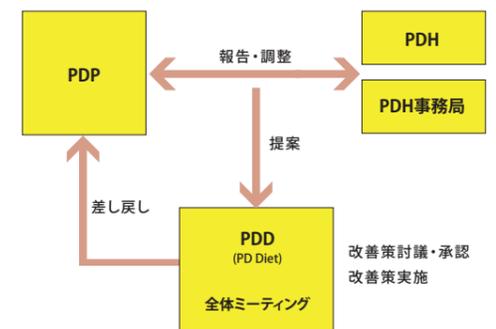
上野 チームとしては、部員が勉強にきちんと取り組むことは立命館の学生として当たり前で、チームとしてはもう一歩踏み込み、社会人として通用する能力を持った人材になるということが、大切だと思っています。そのため、パンサーデベロップメントという独自のプログラムに取り組んでいます。各界の第一人者の方々にお越し頂いてお話を頂き、講演後は講演内容に基づいて学生はグループディスカッションを行います。講演を通じて学んだことを自分達の見解でどのように活かして行くかをチーム全体の共通認識として持てるレベルにしていますが、そこまでやっているチームはあまり無いと思います。そういったプロセスを経験すること

は、スポーツをする上でも、卒業後社会に出てからも必ず役に立つはずだと思ってやっています。ただ、そこまで思ってやっても部員達のプログラムに取り組む姿勢が自発的なものになっているのか、我々としてはなかなか確信をもてきれないところではあるのですが、監督としては、今の取り組みの到達点については、どう感じていますか。  
米倉 「自ら気づき、考え、実践する」というのが、プログラムの根幹だと確信しているのですが、その中でも「自ら」というのが、大学体育会でのコーチングでは非常に大切なポイントだと感じています。我々のチームにも優秀な学生は多いのですが、受け身の姿勢が目立ちます。コーチから言われたことをやれば上手くなれるという枠組みの中で成長する学生が多いのですが、それだけではフィールドの中や、卒業後の社会では通用しません。究極に追いつめられた状況で、頼りになるのは自分だけです。困難な道を自ら切り開いていくためには、「自分で考えて動く力」が必要なのかなと。  
上野 私は実際に部員の前で講演をしたことがあるのですが、彼らは最初から最後までずっと固く集中しっぱなしで、プログラムで実施される講演中は私語はもちろん、笑っちゃいけないみたいな雰囲気がある(笑)。「しっかり聞くこと」それ自体が目的になってはいないかということを感じています。確かにきっちりとした

## PDP (グループ発足までの流れ)



## PDP (改善策実施までの流れ)



態度・姿勢で講義に臨むことはとても大切なことですが、自分の脳をフル活動させて、自分の意見を持つようにならなければ、せっかくの機会がもたないですね。  
金山 教室の中で部分的に受け身になっている学生、そういう存在をアクティブにさせることは実に難しいことだと思います。自主性を養うために、突然「自分の意見を言え」「質問を出せ」とアプローチしても、なかなかすぐにはできないかな、と。どちらか一方が緊張関係にあるとアクティブな動きは生まれにくいので、意図的にどちらかが崩れていく、ミスマッチな形を作り出したところですね。聞き手である部員の方から崩れて行くことはかなり難しいので、話をする側の方から仕掛けて行くほうがおもしろいかもしれません。  
パンサーデベロップメントの資料を拝見すると、セミナー形式のプログラムだけではなく、プロジェクトグループを作って問題解決を図るプログラムもあって興味深いのですが、その他に、例えばチーム外のコミュニティーと学生達を関わるさせることが、大きな刺激になるようなことがある気がします。自分達がチーム内のみならず、外ではどう見られているか、そういう外



## TEAM GOALS

BE THE NATIONAL CHAMPIONS.

日本一になること。

BE A RESPECTED AND SUPPORTED TEAM.

尊敬され、支援されるチームになること。

DEVELOPING OURSELVES AS A “RITSUMEIKAN STUDENT”

立命館大学生として成長すること。

## TEAM SLOGAN 2012

ONE MISSION, ONE HEART.

勝つために、こころをひとつに。

### PDSとPDPの具体的流れ (2~3月の午後に実施)

		PDS	PDP	練習ミーティング
WEEK 0	SAT	①講演会	PDH事務局ミーティング	
WEEK 1	MON	②個人レポート提出	PDHミーティング	ポジションミーティング
	TUE			回生別ミーティング
	WED	③グループ決定・レポート配布	PDPミーティング	
	FRI	④ランチミーティング	PDDミーティング	
WEEK 2	SAT	⑤グループミーティング	PDH事務局ミーティング	
	MON	⑥グループレポート提出	PDHミーティング	ポジションミーティング
	TUE	⑦リーダーミーティング		
	WED		PDPミーティング	
	FRI	⑧最終ミーティング	PDDミーティング	
	SAT	⑨講演会		

的な刺激による気づきを与えてみるのも1つかもしれません。

**米倉** チームは毎年、近隣の小学校に出かけて行って、授業の中で一緒にフットボールをしています。昨年は実験的なのですが、栗東市教育委員会とご一緒させていただいて、小中学校の先生方向けの夏期研修プログラムの1つとして、フラッグフットボール講習会を行ったりもしました。小学生たちとフラッグフットボールを行うと、小学生よりも部員のほうがはしゃいでいたりしますね(笑)。ただ、これは大切なポイントで、フットボールに初めて触れた時の楽しさだったり、面白さをもう一度思い出し、自分達の取り組みの原点に戻るといった意味で、逆に我々が非常にいい機会を頂いているのかなと感じています。ただ、金山先生がおっしゃられたように、今後は別の形で社会との接点を持つということは考えてみてもいいのかもしれません。

### 「純粋さ」の功罪

**米倉** 立命館のアメリカンフットボール部には、日本一になることを目指して入部する部員がほとんどで、彼らを強く結びつけているものは「日本一になりたい」というシンプルで純粋な動機です。チームはとても恵まれた環境の中で、活動しているわけですが、チームへのロイヤリティーや想いが強すぎるのか、純粋すぎるのか、社会に入ってから自分達が大学時代に経験してきた方法論にこだわりすぎて、新たな組織や方法論への順応がスムーズじゃないことが多いのかなとも感じています。

**金山** 想いが強すぎて、発想やプレーが硬直することはありませんか。

**米倉** まさにそれが、パンサーデベロップメントを通じて突き詰めたいポイントです。どのような状況でも、自分の所属するグループ、チーム、

組織のパフォーマンスを100%にするために、自分には何ができるのかを問い続け、最適解を導き出して、実行する。我々のチームでは、コーチングスタッフが選手にも、学生スタッフにも高いレベルでそれぞれのアサインメントを実行することを要求しますが、主体性をもって、自分に与えられた役割を果たす、ある意味、相反することをうまく融合させていきたいと感じています。

**上野** 純粋にチームを信じて、自分のアサインメントをやりきるといことは大切なのですが、それは相手チームがあってのことです。相手チームが想定外の動きをしてきた時に臨機応変に対応できる力というか、真っすぐ過ぎてだまされることがないような、したたかさや視野の広さが出てくると、チームはもっと強くなれるような気がしています。

### チーム内のコミュニケーション能力

**金山** 選手間でコミュニケーションする力は変わっているのですか。

**米倉** 私の感覚では表面的なコミュニケーションはあまり変わっていないように見えますが、最近の部員たちはお互いの心の中の深いところにある壁を、積極的に超えなくなったという印象はあります。感情をぶつけ合うことも減りましたし、遠慮し合っているという感じが強くなっていて、妙に分別がいい「大人」になっているような気がしますね。

**上野** もちろん厳しくするのは厳しいですが、厳格過ぎる上下関係で下の学年が上の学年に何も言えないような古典的な「体育会」という雰囲気ではなく、同じポジションの選手同士の結束はとも強く、ばつと見ただけでは激しいポジション争いをしているようには見えないくらいに、ものすごく仲がいいですね。

**金山** それは大きな変化ですね。距離感を持つということは、どちらも傷つきたくないとか、踏み込みたくないということの現れなのかもしれません。

**米倉** もうひとつコミュニケーションで私が気になるのは、言ったことはできるのですが、言ったこと以外のことは、想像がつきそうなことでも、出来ないことがあることですね。去年チーム全体の認識として共有したつもりなのに、今年のチームでできなかったりすることが、普通にあります。

**金山** トータルにコミュニケーションの問題なのでしょうね。全体で共有するという一歩進んだ対人コミュニケーションは、見配りとも言



える個人ベースでの気づきというか、自分の中で内省的に発想し、次の次を読んで行動することができるコミュニケーション能力を身につけることが出来ないとなかなか上達しません。共有化はフットボールのプレーぶりにも大きく関わりますよね。

**上野** 最近是一般の学生でもなかなかそういった融通がききませんよね。だからこそ、チームの部員は、チームでの活動を通じて、積極的に周りを巻き込んでいくコミュニケーションを身につけ、それを教室で発揮できるように取り組んでもらいたいですね。

**米倉** 大学にはいろいろなバックグラウンドを持った学生がいます。その中で部員は、積極的に回りを巻き込むような存在となって、大学全体に刺激をあたえる存在であって欲しいですね。パンサーデベロップメントだけではなく、チームでは様々なグループミーティングが行われているので、そのための力を養う機会はとも多いはずですよ。

**金山** グループでのコミュニケーションは、グループが作られた直後はお互いに適度な距離感があり、何も問題がないように見えるのですが、徐々にいろいろな不協和音が生じて、ぶつかり、対立して、場合によってはグループが崩壊するかどうかのポイントが訪れます。それを乗り越えられるかどうか、グループでのコミュニケーションの中で重要です。失敗するのもひとつのあり方なので、全てのグループミーティングを成功させるというよりも、時折、崩壊を経験して失敗を学んだ方が面白いと思います。痛い想いをしなければ、自分への教訓になりませんし。指導する側は、グループ崩壊を経験することは、次の強い彼らになるためのステップということを念頭において、あたたかく見守ることがあっていいかかもしれません。

それから、グループミーティングをする際、リーダーがドミネイトしたがるというか、支配的に機能してしまうケースがあるので、そうではない、コミュニケーションを潤滑に回して行くようなリーダーをつくっていただきたいなと思います。

### チームゴール達成のための提言

**金山** あらゆる瞬間にプレーヤー、チームマネジメントスタッフ、コーチングスタッフ、全員が1つの方向を向いて、最適な役割を果たすという意味で、フットボールは究極のコミュニケーションスポーツです。「自ら気づき、考え、実践する」を直線的にではなくて、横に広がる応用力を持って捉えて、幅広く向き合える力が大切なのかなと思います。それが究極のコミュニケーションなのかなと。

一見関係ないと思えることでも、それらはお互いに影響しています。自分がエンゲージすることについては真っすぐに取り組むけれども、それ以外のことは関係ないと思った瞬間に、道から踏み外れていくことはよくあります。自分の身の回りであることで無関係なことはなにもないことに気づいて、初めて応用力のあるコミュニケーションになり得ます。そのプロセスを経ると3つのチームゴールは必ず達成できると思います。

**米倉** ライバルチームのアプローチは立命館と違うとは思いますが、立命館と同等か、それ以上の文化が育っているはずですよ。心血を注いで全力で倒しに行くに値するチームばかりになるので、厳しくも、本当にやりがいのあるリーグですが、勝つことで我々の取り組みの証明をしたいと思っています。